

特別講演 1

「終末期医療における『医療が無力なとき』の医療者の役割」

おかやま在宅クリニック 院長

岡山 容子 先生

通院できない患者を対象とする在宅医療は広い意味で終末期医療です。死は当然いつか訪れるもので、穏やかな死を迎えるために在宅チームは尽力しています。死は自然なものですが、悲劇的な死というものもあり、予想していない死はその一つです。予想していない死では悲劇的感情が大きくなるので、それを避けるために「別れ」をすることの大切さを強調しています。死を前に弱りが大きくなると、「見守り」の時期となります。多くの場合医療は無力になり、病院では医療者は病床から足が遠のきがちです。しかし、医療は無力でもケアが力を発揮します。五感を満足させるケアをおこなうことが重要です。最後のときには家族が必ずしもともにいなくていいことを伝えます。「なるべくそばにいてください」と生活の場で伝えると、ご家族は緊張から解放されなくなるからです。「いつもどおり」を合言葉に、生活の中でケアを充実させて見送ることができるように支援しています。